

カンボジア通信

第6号 2005年 10月17日 発行

〒464-8610 名古屋市千種区今池 2-1-10

河合塾社会貢献事務局 経営企画部内

河合塾カンボジア教育支援グループ

編集：山本雅博(教務企画部)



河合塾のカンボジア募金で、今年もカンボジア-日本友好学園の生徒3名(10年生 = 高校1年生)を招聘しました。来日したのは、(写真左から)ソペアさん(17才)、セットくん(17才)、ムンくん(19才)。8/25~9/4の11日間、東京・京都・名古屋の3地区を訪問。その一部を紹介します。

「パン作り」体験！ 8/26(金)

カンボジアの主食はお米。プノンペンに行けば元フランス領なのでおいしいパンを食べることができますが、彼らの住んでいる地域では口にすることはない食べ物です。塩や砂糖は日本語も知っていましたがイーストは見たこともなく首をかき上げていました。いよいよ製作。さすが毎日自炊しているだけあって勤がよく、初体験にもかかわらずみんな中々の手つきです。100回パン種を机にたたきつける際も最後まで変わらぬペースで腕力を発揮してくれました。発酵させている間に日本語の学習。戻ってきて2倍近く膨らんだ種をみて3

人ともびっくりしていました。その後同じ大きさにそろえてまるめて電気オープンにいれて15分でできあがり。自分で作った焼きたてのパンの味は格別であったという間に30個のパンがなくなってしまいました。ただこの経験をカンボジアでどう活かしていくかは今後の課題です。電気・ガス・水道のない彼らの地域ではオープンに代わるものを作らなければなりません。はかりやオープンの目盛りに頼ることなく五感を駆使しておいしいパンを作り上げていくことの大切さを教えられた活動でもありました。(ドルトン・伊藤)



「紙すき(美濃和紙の里)」体験！ 8/27(土)

名古屋からローカル電車を乗り継ぐこと2時間、美しい川や山々に囲まれた岐阜県美濃市に到着。伝統工芸の美濃和紙の店に入ると、初めて見る和紙絵を手に取り「きれいです」と興味津々。ソペアさんは桜、セットとムン君は平安時代の和紙絵がお気に入りの様子でした。美濃和紙の里会館に到着後、美濃和紙の説明を受けた後、紙すきを体験。先生が幾つかの工程を説明しながら実際にやって見せる様子を食べ入るように観察していました。積極的なセット君、続いてムン君、そして慎重派のソペアさんと、先生の説明したとおり器用に紙をすいていきます。3人があまりに上手にやるので、一番プレッシャーを感じていたのは日本人のFさん。心情を察したのが、頼まれもしないのにセット君がサポートしていました。



先生曰く、「一度説明しただけでこれほど呑み込みが早い外国人を見たのは初めて」とのこと。昨年の陶芸体験のときもそうでしたが、カンボジアの生徒は観察力が非常に優れ実に器用です。機械化が進み手作業でものを作る機会が少なくなった日本人のほうがよほど不器用かもしれません。(トライデント・倉上)

「京の台所」で買物体験！ 8/30(火)

京の人々に「にしき」と呼び親しまれている錦市場に行ってきました。ここには京料理を支えるあらゆる食材が並んでおり、初めて目にする魚や京野菜、漬物、乾物などを不思議そうに見つめる姿が印象的でした。ひととおり市場を見学した後は実際に買物にチャレンジです。「今晚、食べたいものを買ってきて！」とお金を渡した後、三人それぞれが市場の中に散っていったのですが、買物を終えて戻ってきた3人が持っていたものは「バナナ」「白ごはん」「お菓子」。せっかく京都に来たのに・・・その後の交流会では市場で買ったものをみんなで食べたのですが、こちらで揃えた「日本伝統の味」

の中では鯖や秋刀魚の塩焼きが人気でした。梅干も「絶対おいしいから！」と勧めてみたのですが、ムン君は顔をくしゃくしゃにしながら口から出してしまいました。ムン君ごめんなさい m(__)m この日はあいにくの雨天でしたが、アーケードのある商店街では、見て歩くだけでもみんなワクワクと楽しくなってくる、そんな様子がとても伝わってきました。

(大阪南校・西川)



カンボジアの基礎知識

「アンコールワット遺跡」で有名なカンボジア王国は、インドシナ半島の南部に位置し西にタイ、東にベトナム、北はラオスに囲まれた人口 1,350 万人、国土 18 万平方 km(日本の約 50%)、国民の 75%は農業に従事しています。1970 年から 20 年以上続いた内戦で、200 万人近くの人々が命を失い、現在国民の 40%近くが 14 歳以下の子供で占められています。

「近代化が進む都市部」は、首都プノンペンを中心として、幹線道路の整備、近代的なショッピングセンター、ホテルなどが建設され、最新電化製品などを販売する店も多く目に付きます。郊外では、外国人向けのお洒落なレストランが林立し夜遅くまで賑わっています。対照的に、農村では、水道、電気、ガスや医療設備もないところが多く、都市と農村の生活基盤や所得格差が広がっています。また、職を求めて農村地域から都市部への人口流入により、貧富の格差、物価の上昇、地価の高騰、ゴミ問題、交通事故の多発など、近代化に伴う多くの課題を抱えています。



「友好学園」初の「高校卒業式」レポート

去る、6/27(月)に、友好学園で初めての卒業生が巣立つこととなりました。実はカンボジアには卒業式という慣習がありません。そのため、日本の支援者や学校関係者が中心となり、日本の卒業式を参考に準備されました。テントの設営や飾り付け、メッセージカードなどなど。とても丁寧に一生懸命努力されていました。さて、卒業式では、卒業証書(努力賞)授与の時は、さすがにみんな緊張した面持ちになっていました。また、卒業生代表として答辞を読み上げたケン・ソジェット君の6年間の思いが詰まった話に、涙ぐむ生徒もいました。それでも全体的には、終始和やかなムードで進みました。今回、学校を巣立っていく生徒達の将来がよいものになることはもちろんのこと、今後、彼らの後輩達が、より良い学校としていつてくれることを願ってやみません。

(メディア教材開発部・東平)



日本語学習と「愛・地球博」

友好学園から来日する生徒の日本語学習プログラムも今年で3年目になりました。毎年日本で学習した内容を友好学園に戻ってからほかの生徒に教えているようで、日本語学習が着実に引き継がれているようです。今年日本語学習では「日本について日本語で学習する」取り組みを行いました。日本についての基本的な知識はすでに持っていますが、実際に日本で体験したことについて日本語を使って説明したり、カンボジアと比較して考えることで、更に理解が深まったようです。

また今年、授業の一環として愛知万博を訪問しました。万博については事前に説明してありましたが、あまりの広さと人の多さに驚いたのが、会場内に入ってすぐセツ君が「どうして今日はたくさん人がいますか!」と慌てた様子で尋ねてきました。期間限定で巨大な施設を作り、そこに大勢の人が集まる、ということがなかなか理解しづらいようでした。そこでカンボジア館を訪問し、館長さんから万博の趣旨や日本の印象などお話を伺いました。3人の質問に丁寧に答えさせていただきましたが、ソベアさんの「日本人は親切で物を落

としたとき、わざわざ走って届けてくれた」という体験に館長さんが「カンボジアでは落し物は自分の物にしてしまう。国に余裕がないと他人のことまでは考えることができないから」と答えたことが印象に残りました。復興が進んでいるように見えるカンボジアですが、安定した生活を送れるようになるにはまだ支援が必要だと感じました。

川畑貴子(愛知学院大学講師)



<友好学園と日本語教育> 友好学園では、英語、フランス語に代わって日本語の授業が行われています。大学を出ても英語だけしか使えないと、コネなしでは就職できないカンボジアの現状をよく知る、学園代表コン・ボン氏の強い要望で学園設立当初から続いています。河合塾でもお手伝いができるよう日本語学習を招聘プログラムに入れています。

【会計報告】	2004年度	年間募金収入	862,303 円	前期(05.4-9)	募金額	725,604 円
	<生徒招聘(3名+通訳)>	渡航費、滞在費など	714,809 円		生徒招聘残金	147,494 円
	(内訳:カンパ収入 105千円 総支出 858千円)	残金	147,494 円		募金残額計	873,098 円

～ 募金のご協力ありがとうございました。今後もよろしくお願い致します。～

現代カンボジア事情 結婚式

カンボジアの結婚式は、とにかく派手で長い。伝統的なスタイルだと三日間に及ぶ。通常、花嫁の家が式場となる。敬虔な仏教徒が多いので結婚式もお坊さんが来ないと始まらない。ながいお経のあと、行進の儀式、指輪交換、髪の毛を切る儀式、靴を磨く儀式、赤い糸を結ぶ儀式、と伝統的なイベントが続く上に、西洋的な披露宴まである。花嫁は儀式のたびにお色直しをするわけだから派手さの程度は想像に難くない。当然、これを支える人の数も計り知れない。専属スタイリストに專屬メラマン、生演奏バンドと歌手、コックも出張でやって来てにわか作りの厨房で本格的な料理を作る。もちろん、お金のない国なので派手といってもすべて借り物や張りぼてばかりだが、映画のセットのごとく、ちよつと見には分らない。

さすがにプノンペンでは三日間かけるフルスタイルは減り、一日で済ませるのが多くなったそうだが、儀式の種類は減らさないで朝の五時から夜九時までかかる。体力が勝負だ。ところで、結婚式に至る過程はいまだに「お見合い」が主流。お見合いといっても日本のような交際期間はなく、親から紹介されたきり結婚式が終わるまでは話もしたことがない、というスタイルだ。式の当日、メイクアップされた花嫁を別人と見間違ふことさえあるそうだ。少しづつ自由恋愛も増えてきているようだが、ことの善し悪しは別として、社会風習の現代化もこれからの国が通る道なのかも知れない。

